



# カセーイフ 3



川路 新吉

## カセーイフ 3

○社が発売したお手伝いロボット「カセーイフ」は、すべての家事をやってのける万能人型ロボットだ。

見た目は昭和のマンガに出てきそうな、寸胴のやぼったいロボットだったが、機能は高性能。掃除、炊事、洗濯、買い出し、その他雑用、すべての家事に対応していた。

主婦の大きな味方になり、大いなる称賛をえられる、はずだった。

「また苦情か」

ロボットの研究所では、カセーイフを発明した博士がため息をついていた。

博士の机には書類が山のように積もっている。すべて、カスタマーセンターに寄せられたお客様からの苦情の報告書だ。

博士は山のとっぺんから書類を少しつまみとり、目を通した。

『窓の棧にホコリが残っていた、掃除が不十分だ』

『シャツのアイロンがけに時間がかかる。もっとスピーディにならないか』

『片付けられたものが見つからない。もっとわかりやすく片付けて欲しい』

『料理の味は問題ないが、盛り付けがいまいち。もう少し工夫して欲しい』

博士はまたため息をついた。

全部取るに足りないものばかりではないか。自分たちが家事をしていたなら見過ごすようなものばかり。もし夫に同じ事を言われたら、「主婦の大変さも知らないで」と怒り出すに違いない。

。

主婦たちの勝手な言い分に、博士は腹がたった。しかし同時に、悔しさもあった。そこまで言うのならやってやろうじゃないか。

博士は研究室にこもりカセーイフの改良を始めた。

半年後、カセーイフ2が完成した。

見た目はこれまでのカセーイフと変わらず寸胴なおおきな茶筒に手足が生えたようなものだったけれど、機能面では新たに学習機能を搭載した。学習機能によって、日に日にその家庭のニーズに細かに合わせていくようになり、一ヶ月もたつと何の文句も言えないような働きをする。

カセーイフ2は発売直後は静かな売れ行きだったが、ちょうど一ヶ月たったころから家事を完璧にこなすカセーイフ2の実力がじわじわと口コミで広がり爆発的なヒット商品になった。

いまでは博士の机の上にはひとつの書類もない。お客様からの苦情は全くこなくなった。

「はっはっはっ。どうだ。見たか、カセーイフの実力を」

ひとしきり鼻高々に笑うと、博士は研究室の奥にある実験室に向かった。

「これでやっと、外見の開発に取りかかれるわい」

博士が考えていたのは次の一手は、カセーイフのその外見だった。

これまで機能面の向上を優先していたため、外見は機能上必要なデザインしかしていない。そ

のことに博士は不満だった。

機能も外見も最高のロボットを創る。人間と比べても遜色ない、いや普通の人間よりもかわいく、そして完璧に家事をこなす家政婦ロボットを創るのだ。

博士は使命に燃え、カセイフ3の開発を始めた。

カセイフ2の発売から半年後、博士はカセイフ3を完成させた。

家事を完璧にこなす機能面はそのままに、外見は大幅に向上した。そのルックスはそんじょそこの女優には負けない。研究所内で歩行試験をしていると、すれ違った男性研究員がつい振り返ってしまうほどだ。

「どうだ。完璧なお手伝いロボットが完成したぞ。また爆発的に売れるに違いない」

博士は自信満々にカセイフ3を世に送り出した。

カセイフ3は、あのカセイフ2の後継機で、しかも見た目もすばらしいということもありメディアにも大々的に取り上げられ、これまで以上の華々しいデビューを飾った。

称賛だって、これまで以上、最高のものを得られるはずだった。

しかし、一ヶ月後、博士の机にはまた山のような書類があった。

すべて、カセイフ3に対する苦情だ。

博士は書類の一部を手に取り目を通した。

そこにはこんなことが書かれていた。

『すました顔して、完璧に家事をこなすのが気に食わない』

『旦那が私よりもカセイフの方をかわいがってしまう。どうしてくれるんだ』

## カセーイフ3

<http://p.booklog.jp/book/39093>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39093>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39093>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.